

使っています！

BIG DIPPER English Course I/II ベーシックノート

* I. 滋賀県立伊吹高等学校教諭 安居 宏先生

1. 学校の背景

伊吹山の麓、米原市(旧山東町)に位置する昭和58年創立の高校で、普通科4クラスの中に体育コースが1クラスある。生徒の半数強が大学に進学する。英語の平均偏差値は40程度。

2. この教科書・ベーシックノートを選んだ理由

以前にはもっと易しい教科書を採用していたこともあったが、本校では国公立大学を受験する生徒もいるので、基礎から受験に対応するまでの学力を築き上げることのできる教科書を使いたいと思い、選んだ。また、教科書の英文をそのまま与えると、生徒は何から手をつけてよいかわからないが、『ベーシックノート』は本文の段落ごと・フレーズごとに区切られているので、より小さな単位に集中させて授業を進めることができる。だから『ベーシックノート』を中心に授業を運ぶことにした。

3. 授業の進め方

英語 I・IIとも週3時間。基本的に教科書はあまり参照せず、『ベーシックノート』中心に授業を組み立てている。用途に応じてプリントを数種類用意している。各パートにかける時間は2時限から2時限半。

授業は「声を出して読む」「書く」「考える」ための時間であり、ただ何かを書き写したり、ぼんやりと話を聞いたりするための時間ではないと指導している。

a. 音読・発音

まず、それぞれの単語を読めるように指導する。生徒はその発音をカタカナや平仮名で書いてもよいが、必ず自分の口で発音させる。その後、Class Around Reading を実施する。これは生徒が順番にワンフレーズずつ読み、発音が正しくないと笛を吹き、もう一度最初のフレーズから始め、終わるまで何度でも繰り返すという活動である。生徒はゲーム感覚で楽しんでいるが、確実に正確に読めるようになっていく。

b. 語彙

予習はあまり期待できないので、『ベーシックノート』の「単語を調べよう」に挙がっている単語ならびにその他に復習しておきたい単語や触れておきたい単語について、品詞・発音・意味を一覧にしたプリントを作り、パートごとに渡している。生徒たちはこれを頼りに意味を捉える。日本語訳を覚えることが目的ではないので、一文を通したきれいな日本語訳は求めず、フレーズごとの意味を理解できればよしとしている。

さらに、前述のプリントで挙げた単語の意味と、8回綴りを書けるスペースを設けた別のプリントを生徒に与え、手を動かして書き込み、かつ暗記させることによって、意味と綴りを復習させている。

c. 文法事項

各パートで理解させたい文法項目が、他の文法や語句の説明でばやけてしまわないように、基本的に各パートで挙がっているターゲット・センテンスを説明するのみとしている。定着には、『TEACHER'S MANUAL 付属データ CD-ROM』収録の文法補充問題にヒントを加えたものを用意し、随時利用している。

ただし、時制のように広がりのある内容については、どの部分を学習しているのかを生徒が理解していないことが多いので、黒板に貼れる一覧を用意している。例えば、現在完了進行形であれば、完了形を一望できる一覧を作り、全体を見ながら生徒に説明している。この一覧表は板書する時間も省けるので便利である。

4. ベーシックノートの効果

既に述べたことだが、フレーズごとに区切ることで、説明しなければいけないことが少なくなるので、生徒が集中しやすい。また英文はフレーズがながったものであることが理解しやすく、フレーズ

の意味を理解すれば、そのまま intake の活動もっていくこともできる。

5. ベーシックノートに望むこと

「単語を調べよう」では動詞については目的語や補語が続くことを明示しておいたほうが、コロケーションがわかり、生徒の発信に役立つと思う。また、

本校の生徒だと、「段落ごとにまとめよう」（日本語による大意要約の空所補充）に多くの紙面を割いてもらうほうが、パート全体の内容が確認できてよい。

*先生に伺ったお話を編集部でまとめさせて頂きました。

II. 滋賀県立守山北高等学校教諭 松村 友二先生

1. 学校の背景

守山市の東北部に位置する教育環境に恵まれた全日制普通科。進路は国立四年制大学から就職まで多岐にわたる。中学の基礎的な事項が定着していないため、生徒は「英語はだめ」という意識が強い。

2. この教科書・ベーシックノートを選んだ理由

苦手意識の強い生徒にも英語学習のやり方がわかり、興味関心をもって授業に参加し、英語力が定着してくれることを願い、教科書はもちろん周辺教材にも着目したところ、教員にとって授業展開がやりやすく、生徒にとっても教科書理解が深められる専用ノートがあったことが BIG DIPPER 採用の理由の一つ。

3. 授業の進め方

1年では英語 I に週5時間、うち3時間を教科書にあてる。基礎力養成の第一歩は、英文が大きな声ですらすら読めることである。読めたら暗記でき、それが英語力の定着へとつながっていくものだと思う。

授業ではできるだけ簡単な英語を用い、English class の雰囲気を作り出す。例えば、英語 I LESSON 2 では、Do you like hamburgers? とか What kind of fast food do you like best? などの質問から始め、本文のリスニングを行う。生徒に集中させるために、(少し意地悪なのだが)途中で止めてどこで止めたかを言わせたりすることもある。次に、ベーシックノートで単語・熟語の意味確認、発音指導を行う。動詞の活用が必ず確認できるので、英語が苦手な生徒がつまずきがちな盲点をフォローできる。その後、センス・グループを意識させながら再度 CD を聞かせる。さらに教師の後について読みの練習を徹底して行う。段落ごとに注意点を示しながら、大きな声が出るまで指導する。読むときは必ず全員起立させる。個人読みでも、例え

ば、制限時間内に4回読むように指示をしたときには、1回目は正面を向いて、それから「回れ右」をして2回目、というように生徒に時計回りに立つ向きを変えさせて、彼らは何回読んでいるかがわかるようにし、机間巡視して個別に注意を促す。重要な英文に空所を設けて板書し、すらすら言えるまで練習させることもある。

内容理解に関しては、「ポイントをつかもう」や「段落ごとにまとめよう」で大まかな内容把握が可能であるため、本文の和訳には時間をかけない。「ポイントをつかもう」は内容把握のための英問英答の練習へと応用ができる。また、この2つの演習は、テキストの練習問題 Read It Through との相関性もあり、同じような内容の設問でも角度を変えたアプローチがなされており、苦手な生徒にも、ポイントを繰り返してまとめられるようなものであるため、大変わかりやすい。センス・グループごとの意味確認は、各課終了後に「TM 付属データ CD-ROM」を編集したプリントを配布する。ノートを経てテキストの練習問題で一通りの確認ができたなら、本文を書き写す「視写」で締めくくっている。生徒には、できるだけ英文を見る回数を少なくして書くことを要求している。

4. ベーシックノートの効果

ベーシックノートを持たせたことで、生徒が予習でやるべきことがわかり、自主的に学習を進めていく姿が見られる。最近、再び音読指導が見直されているが、ベーシックノートは「フレーズリーディング」を意識した編集で、本当の意味で英語がわかったといえるようにしたいという編集側の意図も伝わってくる。従来の授業パターンからの脱却には、このノートの有効活用は大いに役立つものだといえる。

今後も現場の意見を反映した周辺教材作成を期待したい。